

IV. ベトナム国家大学（ハノイ）人文社会科学大学への教員派遣事業

1、派遣教員、奈良女子大学研修生

派遣教員	内田忠賢	奈良女子大学人間文化研究科教授
研修生	樽井由紀	奈良女子大学大学院人間文化研究科 研究員（比較文化学専攻）

2、派遣期間および現地での活動

平成 23 年 10 月 30 日（日）～11 月 6 日（日） 8 日間

内容：10 月 30 日（日）出国（関西空港→ハノイ空港）

11 月 31 日（月）本学大学院出身者の PHAM THI THU GIANG 専任講師に伴われ、派遣先の関係者を表敬訪問。また、GIANG 講師と一緒に、お茶の実習で使う茶器を買いに出かけた。

11 月 1 日（火）講義初日（以下、4 日間ともに、講義は 13～17 時）。

11 月 2 日（水）講義 2 日目。終了後、日本学専攻の大学院生と懇談（全員女性。多くは日本語能力を生かして就職しているが、大学院にも在学し勉強を続けている）

11 月 3 日（木）講義 3 日目

11 月 4 日（金）講義 4 日目。終了後、人文社会科学大学の「よさこい」サークルの学生と懇談。

11 月 5 日（土）GIANG 講師（上記*）のご案内によるハノイ郊外見学の後、ハノイ貿易大学での「日本文化の夕べ」に出席し、在ハノイ邦人および貿易大学関係者と交流。深夜に出国（ハノイ空港）。

11 月 6 日（日）帰国（関西空港）

3、事業概要

3-1 講義予定（テーマ「日本の歴史と文化および現代社会」）

第 1 日目 「日本の歴史（古代から近代）」

第 2 日目 「現代の日本（現代社会および日本文化）」「伝統文化の体験実習 I（茶道）」

第 3 日目 「日本人の日常生活」「伝統文化の体験実習 II（華道）」

第 4 日目 「映像に見る日本」「講義のまとめと補足」

3-2 使用した資料類

[使用した教材類]

・高木実・高木幸子（著）『はじめまして せかいちず』平凡社、1992 年（第 2 版）

・東京法令出版編集出版部（編）『ビジュアル歴史（中学校社会科 副教材）』東京法令出版、出版年なし

- ・(株)三越(編)『日本を楽しむ年中行事』かんき出版、2004年
- ・山寄泰正(監)『えほん百科 ぎょうじの ゆらい』講談社、2002年
- ・P.メンツェル他(著)『地球家族：世界30カ国のふつうの暮らし』TOTO出版、1992年
- ・P.メンツェル&F. ダルージオ(著)『続・地球家族：世界20カ国の女性の暮らし』TOTO出版、1998年
- ・P.メンツェル&F. ダルージオ(著)『地球の食卓：世界24カ国の家族のごはん』TOTO出版、2006年
- ・庄司博史・国立民族学博物館(編著)『多みんぞくニホン 在日外国人の暮らし』千里文化財団、2004年

[映像類]

- ・映画『ALWAYS 三丁目の夕日』(日本テレビ+電通ほか制作、東宝、2006年)
- ・TV番組『新日本紀行ふたたび：踊る阿呆の暑い夏』(NHK、2007年)
- ・TV番組『新日本紀行ふたたび：野馬追・熱き想い：福島県相馬市』(NHK、2008年)
- ・TV番組『プレミアム10 ありがとう阿久悠さん：日本のヒットメーカーが生んだ名曲たち』(NHK、2007年)
- ・映像『2008 第17回 YOSAKOI ソーラン祭り』(YOSAKOI ソーラン祭り組織委員会、2008年)

3-3 講義概要

内田が主として講義を、実習を主として樽井が担当しましたが、講義の内容でも、適宜、樽井がサポートしました。

■日本の歴史：古代から近代(内田)

日本の歴史を大まかに紹介しました。奈良女子大学がある「奈良」という街は、都市として初めて首都がおかれた場所。ずっと天皇がリーダーだったと思われがちですが、貴族や武士が権力を握る時代が長く続きます。19世紀半ば以降は、立憲君主国として、脱亜入欧の方針を取り、やがて、世界中の国々と戦争をして、敗れます。今回は年表と日本地図などを使いながら、特に国際関係史を中心に概説しました。

日本は、奈良に首都が置かれる以前から、アジア地域と交流がありました。主に狩猟採集、せいぜい雑穀しかしていなかった日本に、弥生時代、中国南部からインドシナ半島から、稲作が伝わってきます。照葉樹林文化が伝わったとも言います。

飛鳥時代、奈良時代になると、中国の影響を強く受け、また、中国に遣唐使を派遣するなど、積極的にアジアと交流します。平安時代に入ると、中国や朝鮮半島との交流が下火になり、日本独自の国風文化を育てることになります。漢字から平仮名、片仮名を発明したのは、この頃です。

平安末から再び、アジア大陸との交流が復活しますが、陸から離れた島国であったため、大国である中国から攻められたのは、鎌倉時代の元寇だけです。この2度のモンゴル軍と

の戦いは台風によって、退けることができました。「神の国」との自意識が芽生えた頃だったので、この偶然の勝利は「神風」と信じられ、後の近現代まで、国難の際に「神風」を期待する国民性が養われました。天皇は長く京都（それ以前は奈良）に住んでいましたが、平安末から政治を武士階級が握り、鎌倉時代および江戸時代は関東地方（鎌倉・江戸）が中心でした。

室町時代には、モンゴル族の国から漢民族の国に戻った中国と交流が復活、禅宗を中心とする中国文化が深く日本文化に根付くようになります。ベトナム（南越）に日本人町が作られたのも、この時期。世界が大航海時代に入った安土桃山時代には、ポルトガルを中心にヨーロッパ諸国との交流が始まります。しかし、江戸時代、徳川幕府は約 200 年にわたる鎖国政策を取り、海外との交流を絶ちます。幕末、黒船の来航により、鎖国は解かれ、明治維新によって、武士から天皇中心の時代に戻ります。天皇は長く暮らした京都から江戸（東京）に移り、それ以後、現在まで、東京が政治・経済の中心になります。

明治から昭和の初めまでの日本は、脱亜入欧や殖産興業のスローガンのもと、欧米列強と並ぶ帝国を目指しました。日清、日露という 2 度の戦争に勝利し、日本は軍事力による勢力の拡大を図ります。第二次世界大戦では、植民地政策により、ベトナムを含むアジア各地や太平洋の島々に、日本軍が進攻しますが、アメリカ合衆国を中心とする連合国に完敗。広島、長崎に原子爆弾を投下され、連合国に降伏します。

授業では、テキスト『ビジュアル歴史』添付の「歴史カード」33 枚のカラーコピーを出席者全員に配り、その写真を見ながら説明したことは、効果的でした。

■現代の日本：現代社会および現代文化（内田）

第二次世界大戦の敗戦後、世界の最貧国となったものの、高度経済成長を遂げ、アメリカ合衆国に次ぐ、世界第 2 位の経済大国になります。工業化社会から消費社会となり、先進国同様、低成長期を迎えます。生活文化は豊かになったものの、混迷の時代が来ています。今回は、写真と年表、映像を見ながら、お話をしました。第二次世界大戦後の庶民生活については、映画『ALWAYS 三丁目の夕日』を活用した。

連合国と講和条約を結んだ日本は、各国に戦後補償（賠償）をしながら、少しずつ、経済力を付けてゆきます。最貧国から経済大国へ成り上がるプロセス、高度経済成長期は、世界に向けて、東京オリンピック、大阪万国博覧会を開催し、国民の可処分所得は急増し、日常生活にも耐久消費財が行き渡った時期でした。その一方、四大公害ほか、高度経済成長の矛盾が表面化しました。貧富の差は少なくなり、国民が「総中流化」しました。

1980 年代以降の低成長期に入ると、日本経済の中心は、ハード（物資）からソフト（情報）に移行してきました。文化的には、長くアメリカ志向が続きますが、最近では、アジア諸国をはじめ、世界中の文化から刺激を受けています。社会の国際化も進み、外国人との共生が課題となっています。外国人の定住としては、第二次世界大戦以前の、中国や朝鮮半島からの移民（オールド・カマー）、80 年代以降の中国人、日系ブラジル人、日系ペル

一人などの移民（ニュー・カマー）が有名です。

1990 年前後には、バブル経済期と呼ばれる好景気が短期間あり、また、その後の不況期の中で、独自の現代文化が生まれることとなります。アニメ、オタク文化など、ベトナムの学生がご存じの日本文化が、それです。

■日本人の日常生活（内田）

日本人の伝統的な生活文化は、地方によって異なります。特に、食文化は各地方の名産があり、たとえば、お正月の食事は様々なパターンがあります。現代の衣食住は、グローバル化が進んだため、日本中、似ています。たとえば、食事は世界各地の料理が、日本風にアレンジされながら、家庭の食卓に並びます。写真や映像を見ながら話しました。

①衣：いわゆる和服は平安時代の貴族の衣装に源流があると言われています。しかし、明治時代に入るまで、一般庶民の衣服は、簡素なものだったと考えられます。明治以降、洋服が普及し、現在に至ります。冠婚葬祭には、特別な衣装を着ます。女子大生が卒業式に着る袴、結婚式に着る女性のウエディングドレス、冠婚葬祭の黒い洋服、和服などが特徴的です。中学生、高校生の制服も興味深いものがあります。男子の詰襟制服、女子のセーラー服です。両方とも日本海軍の制服に源流があります。

②食：米食が中心だと考えられがちですが、一般には、長年、雑穀（麦、粟（あわ）、稗（ひえ）など）を、日本人は食べてきました。様々な節目に「赤飯（せきはん）」や「餅（もち）」を食べる習慣は、その名残だと言われています。明治以降、多様な食文化が展開します。日本人の国民食となったインドのカレー、中国のラーメンや餃子、イタリアのスパゲッティ、ドイツのハンバーグ、アメリカのハンバーガーなどは、伝わった経緯に興味深い点があります。なお、テキスト『地球の食卓』では、外国人から見た日本の 1 家族の 1 週間の食事が記録されており、「寿司」「刺身」を毎食、口にすると紋切り型に考えられがちな日本食の先入観を拭い去ってくれます。

■日本女性の日常生活

現在の日本では、女性の社会進出が進んだとはいえ、家事労働や育児ほか、外からは見えない労働（シャドウ・ワーク）となっています。『世界 20 カ国の女性の暮らし』に登場するウキタ・サヨの生活は、学生にとって意外な面が多かったようです。最終レポートには、この記事を読んだ感想文を求めました。

■伝統文化体験実習Ⅰ：茶道（樽井）

欧米で「ティ・セレモニー」と呼ぶ日本文化の代表を、出席者全員に体験し、味わってもらいました。日本から、複数の茶道具一式、お茶と和菓子を持参しました。器は授業前日、GIANG 講師と一緒に、ハノイ郊外の陶器産地、バチャン村にて購入しました。「お手前」ほか、茶道での作法について、歴史的経緯を踏まえながら、講義しました。

■伝統文化体験実習Ⅱ：華道（樽井）

華道（生け花）を、出席者全員に体験してもらいました。剣山は日本から持参しましたが、花器はハノイにて購入、お花は授業前に GIANG 講師と一緒に、花市場にて購入しました。華道の歴史や作法を講義した後、基本形は指示したものの、各人の美意識に従い、生けてもらいました。

□補足1（内田） 「日本人」という表記について。歴史的に「日本民族」は、朝鮮半島や北方、太平洋の島々から渡来した人々の混血から生まれたと言われます。また、北海道に住む「アイヌ」の人々、琉球（りゅうきゅう）諸島の人々など、昔から、人種的・文化的に多様な民族が暮らしていました。日本には、「日本語」を話し、「漢字仮名混じり文」で文字を書く、同じような人々ばかり暮らすように見えますが、様々な理由で、朝鮮半島や中国から移住した人々が暮らすほか、日本も多民族国家となっています。

■映像に見る日本（内田）

現代の人々の暮らしを、映像で紹介しました。伝統文化と現代生活の交錯する場面を見せようと、NHK「新日本紀行ふたたび」シリーズを活用しました。このシリーズは、同じ対象をドキュメンタリーとして、高度経済成長期と現代に撮影し、比較しており、非常に勉強になります。

最初に、踊りと音楽が楽しい映像記録「踊る阿呆の熱い夏」を使いました。映像では、徳島市の阿波踊りに賭ける人々の姿を、2000年代の映像および40年前の映像を比べています。そこから、日本社会の変化、伝統文化への人々のスタンスなどを、学んでもらいました。

次に、江戸時代の武家の行事が現代に伝わる「野馬追・熱き想い：福島県相馬市」を使いました。相馬市は、今年3月に発生した東日本大震災、そして福島県太平洋沿岸での原子力発電所の事故で被害を受けた地域なので、その話題にも触れました。

また、日本の大衆文化、特に高度経済成長期の歌謡曲について、「ありがとう阿久悠さん：日本のヒットメーカーが生んだ名曲たち」に収録されたいくつかのヒット曲を映像と共に楽しみました。歌謡曲だけでなく、大衆文化が国民全体のものから、世代や個人に応じた多種多様なものとなってゆく現在の様子について紹介しました。

さらに、学生からのリクエストもあり、私自身が調査研究する現代のイベント祭りについて紹介しました。北海道札幌市で行われる「YOSAKOI ソーラン祭り」の映像です。伝統と現代が混じり合った新しい祝祭です。現代日本における文化のハイブリッド性を説明したいところですが、ベトナムの学生に伝えるのは少々困難でした。